

ブラインドマイブラザー

柳なつき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初の律モブです。

律くんの、モブくんに対する、どうしようもなくぐちやぐちな思考です。

英語でbrotherという兄という意味も弟という意味もあるの、中一のと時から性癖です。

作中で律くんが師匠のことをあんまりよく言っていないんですが、書いたこちらとしてはししょおも大好きなので、律くんの思春期だと思っ
てご容赦ください……。

目次

ブラインドマイブラザー

兄さんに世界のすべてを見せたくない。

この感情が突き上げてくるとき、僕はいつも思う。

——兄さんに、世界のすべてを見せたい（わけではない）と、いうことなのか。

それとも、

——兄さんに、世界の（ありとあらゆる、）すべてを（見せたくない）と、いうことなのか。

そんなの、どちらでもいい。

愚かな思考に倦む。そして、わかっている、酔っている。

兄さんのことを考えるとき、僕は正気ではいられない。

僕に向かってのみ笑う兄さん。食事のときにいつもスプーンを曲げてしまう兄さん。足の遅い兄さん。水色のパジャマの兄さん。超能力をつかう兄さん。超能力をつかって僕をまもった、兄さん。

——ありがとう。律。

僕は汚いけれど兄さんは水晶のように、きれいだ。

僕を見ないで、兄さん。

そんなまっすぐな目で僕を見ないで、

……違う、違うんだ、

世界のすべてを見ようとしないで。

★

授業中でも考えている。兄さんのことを考えている。

生徒会の権力を用いて学校じゅうを抑圧して支配して回る、そんなことはやってしまえば簡単なのだし、そんなくだらしないお遊びなんか、慣れてしまえばどうってことない。——お遊びだと言い切るには、ちよつと悲惨な気もするけどさ。抑圧されて支配されたがわではなく、僕たちだよ、僕たちのこと。

兄さんから逃れられない僕のことだ。

いま、なんの科目かもろくに認識していない。視線を上げれば黒板に英文が書いてあったので、英語の授業なのだろう。僕のノートにも黒板のままの英語が書かれている。僕はボールペンを持っている。黒板を写していたみたいだ、とひとつごとのようにして思う。こんなレベルだったら自動筆記でいける。

兄さんが中一のときにもさんざん苦労していた勉強。僕は、かくもたやすくこなせる。

兄さんはさいきん部活に入った。

肉体改造部、とかいう、よくわからない部活。でも兄さんはがんばってるみたいだ。一生懸命やってるみたいだ。

……そんなの、いいよ。

やらなくっていいんだよ、兄さん。

勉強だつて体育だつて、僕がぜんぶやってあげる。なんなら家事だつて仕事だつてぜんぶ僕がやるよ。兄さんはなにもやらなくっていい。ただ兄さんはそこにいて笑ってればいい。兄さんはストレスを溜めず、笑っていいれば、それでいいんだ。

生きていけばそりやストレスなんか溜まるさ。

学校、人間関係、進路、才能、努力、僕たちを惑わすワードのなかで、僕たちはなすすべもなく惑ってばかりなんだから。

でもそんなの承知のうえさ。中二に上がったって、中三に上がって

も、高校生になっても大学生になっても社会人になっても、そんなのずっと続くことを僕は知っている。まともに生きようとすれば、するほど、この世は息苦しい。

だって生きるってことは苦しいってことだろ？

だから、兄さんだけは、ストレスなんか感じなくっていいんだよ。

——だって兄さんはとくべつだから。

とくべつな兄さんを、平凡な僕がまもってあげることには、どこか矛盾があるかな？ 限界があるかな？

僕しか知らないんだ。兄さんのこと、

兄さんは危険なんだってこと、

そして、

だれがいちばん兄さんのことを考えてるのか、ってこと。

★

「律」

僕は僕の表情筋がつかれるなかで最上の、しかし控えめな笑顔で振り向く。

僕と兄さんの家はおなじだ。だから帰り道に鉢合わせたってなにもおかしくはない。そんな、そんな当たり前前のが、こんなにも、泣きたくなるって、きつとそこらへんの兄弟にはわからないのだろうな。

「ああ、兄さん」

「きょうは生徒会はないの？ 律がこんな時間に帰るなんて珍しいね」

「うん、生徒会も毎日やってるわけじゃないからね。たまの休みで嬉

「しいよ。兄さんこそ部活とか……バイトは？」

「たまたまね、どっちもないんだ。……師匠にいつ呼び出されるかはわからないけど」

「そっか」

僕たちは並んで歩き出す。

きょう起こったこととか、猫が通ればかわいいと言うし、僕たちは笑いながら、笑いあいながら、歩く。夕方の住宅街を歩いていく。

光は優しい。夕暮れの光はとくに、優しい。

僕は告白したくなる衝動に駆られる。

ねえ、兄さん、僕はずっと、ずっとあなたが怖いんだ、でも怖いからってね、逃げることもできないし、克服することもできないし、どうしようもないんだ、だからあなたに目隠しをしたかった、世界のどうしようもないこと汚いこと、見てしまうからストレスが溜まるんだって、思ってた、愚かにも僕は思ってた、だからそのストレスを消してあげればいいって思ったし、そもそも、ストレスを感じなければいいんだって、思ったんだよ、だから僕は勉強も運動もひと倍がんばった、兄さんのできないことはぜんぶやってあげようと思った、兄さんが笑っていられるためなら、人生だって捧げるよ、でも兄さんは自分から外へ行ってしまおう、あのうさんくさい詐欺師のところを最たるものだ、初恋だって部活だってさ、馬鹿らしいよ、兄さん、ぜんぶ僕がやってあげるよ、そうぜんぶ、一生かけたって兄さんを僕は、まもるよ、兄さんに目隠ししてさ、でも暗闇は見せないよ、僕という光を、僕が、光に、なるよ、

「律？…どうかした？」

僕は笑う。

「なんでもないよ、兄さん。兄さんこそさいきん、悩んでることとかないの?」

兄さんも、笑っている。

次に言うことは、言われなくても知っている。

——だいじょうぶだよ。ありがとう。律。

夕暮れの光は優しいけれど、やがて暮れる。

目隠しなんかされているのは、はたして、どちらなのか。

その答えを僕は知らないし、

知りたいとも思えないんだ。